キミと見た冬

遥子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミと見た冬

【Nコード】

N1623E

【作者名】

遙子

【あらすじ】

ライブ活動をしているケンジと冬が大好きなキヨの二人の切ないお話。

「じゃあ、明日な!!」

バンドのメンバーと別れて自分のマンションへ戻った。

誰もいない部屋にむかって

「ただいま…」と小さく呟いてみた。…あたりまえだけど返事が返ってくることはなく、そのままダイニングルームへとむかった。

いつも真つ先に目に入ってくるもの、それは…

笑顔の少女の写真。

ふと、外を見ると粉雪が舞いはじめていた。

「今年の初雪だあゝ。一人で見るのは何か淋しいけど（苦笑）……あれからも1年になるのか…。」

「ケンジいー!!!!!!」

遠くの方からオレの彼女、キヨの声が聞こえてきた。振り向くと、向こうの廊下から走ってこっちに来る。手を振ってオレの名前を叫びながら…ウザイっっ…というか恥ずかしいノノノノノ

「っお前！！！！何だよ？！人の名前呼びながら来んじゃねえーよ！！！！！」

「はあ？！彼女に向かってヒドくない？せつかく今日のケンジの初ライブハウス行ってあげようと思ったのになあ。」

「っんなっ！だってお前、今日病院いく日じゃなかったっけ？」

「いいの！病院なんてほぼ毎日いつてるようなもんだから。それより大事なことだっただってあるんだから。」

「それってオレのライブのこと？」

「：／／／／。」

キヨが赤くなった。どうやら図星らしい。

「だってライブハウス初めてでしょ。やっぱそうゆう時って彼女とかけたほうが緊張しないかなあ〜とおもって。」

いや、キヨいるほうが緊張するから！だっけキヨのために作った歌を唄うつもりでいたから。

「それにケンジの歌まだ一回も聴いたことないからさあ。」

「あ…。」 そういえば。

キヨは昔から病気がちな体だったから放課後は友達と遊ぶことなく直ぐに帰っていった。オレたちのバンドは夜、活動してるかやキヨに聴いてもらったことは一度もなかった。

「あんまり期待すんじゃないぞ。ライブ行く前にへたなヤツのCD
いっぱい聴いてこいっつー!!!」

「何それ(笑)」

「よしっ!じゃあ、帰るゾ。」

「うんっ。」

ああ、恥ずかしいけどキヨのために作った歌、聴かせてやるか。ラ
イブの時まで内緒にしとこ。」

「うわっ!寒いぃ」

寒いぃ〜vvvv」

「.....」

「あれ?ケンジもしかして寒いのが苦手?」

「...お前は、寒い言いながら何でそんなに喜んでんだよ。全然喜べ
ねえーよ。っーか昔っから好きだよね冬。何で?」

「だって冬だよ?クリスマスだよ?クリスマスっ!それに...」

キヨの言葉が途切れると同時にオレの頬の上に冷たい物が落ちてき
た。

「…雪とかね。」

「どつりで寒いわけだよ。」

「ねえ、すつごくキレイじゃない？初雪だよね。」

「いや、寒いだけだ。…っわ?! なっ何??」

キヨはいきなり、オレが手を入れていたジャケットのポケットに自分の手を入れてきた。

「何すんだよ!!!!!! / / / / /」

「アハハ。あつたかいじゃんこんなか。本当に寒い?」

そう聞きながらキヨが顔をのぞきこんできた。

…ズルいよ、その顔…

オレはポケットの中にあるキヨの手を握った。

「っ?! / / / /」

「うん。さみい。」

本当はこんなのウソ。

雪の舞う中を、このまま二人で歩く。これ、はたから見れば超バカ
ツプルだあ（笑）

「雪…やっぱりキレイv。」

キヨは、ボソツと言って、しばらく空を見上げた後 オレの方をむ
いて笑いかけてきた。

いつもより寒いその日

でも

キヨのおかげで

いつもの倍あったかい。

オレ達の前のバンドがおわってよいよ順番がまわってきた。 ヤ

バイ緊張してきた！

他のメンバーも緊張してんな。 つよし！！！！

「力抜いて楽しんでこようぜ！！！」

「おうっ！」

「そうだなっ。」

「よしっ。 行こうぜ！」

ステージに上がるとライトがすごく眩しかった。

ライブハウスは客でいっぱいだったけど他のバンド目当てだろう。

「えっと、はじめまして。 LUCKYSです。 とりあえず今日はバンド名とメンバーの顔を覚えていってもらえたらいいなあと思っています。」

うわぁ〜あいさつってこんな感じでいいのかな。

「じゃあ、曲聴いてください。」

イントロが流れ出して唄いはじめる。

客の中からキヨの姿を探した。

叫んで手を振ってくれてる人…。

めっちゃノリノリの人…。

オレ達の友達…。

キヨの姿は…。。ない。

「何だよ!…来るつつつたじゃん!!!!」

オレは何か苛ついてキヨのために作った歌をテキストウにうたった。

この時のキヨの気持ちも知らずに…。

こん時のライブは今までで一番最悪なものとなって終わった。

次の日、学校に行くと、いつも誰よりも先にきているキヨの姿がない。

昨日どうしたのか聞こうと思ってたのに…。

朝のHRが始まって、授業が始まって、キヨが来ることはなかつ

た…。

放課後、キヨと一番仲のいい佐藤にキヨがどうして休んだのか聞いてみた。

「はぁ？あんた彼氏のくせに何も聞いてないわけ？」

「????つえ、何?どうゆうこと?」

「ホントに何も聞いてないんだあ。あのね、……………」

?!つつ

オレは学校を飛び出し、無我夢中で走りだした。

昨日の自分に後悔しながら。

…キヨが入院したという病院まで…。

キヨの病室の前まで来た。患者さんと看護師さんの話し声が聞こえる。

消毒液の臭いが鼻をつく。今度は苦しそくに咳をする人が…これはキヨだ！

「キヨ!!!!!!大丈夫か?」

キヨは風邪をこじらせて入院した。

昔から体の弱いキヨは病院がよいの日々で、オレも気を付けてたのに、昨日はオレのライブに行くために無理して学校に来ていたらしい。

「ケンジ？」

キヨがこつちを見る。

オレ今どんな顔してんだろ。昨日は来なかったキヨに苛ついて、でも今はそんな自分に苛ついている。

「ごめんね…ごめん…ね。」

「っんなっ」

キヨがいきなり泣きだしてあやまってきた。

「ライブ行くなって約束したのに、初めてのライブハウス応援するって言ったのに…こんな体のせいで、ケンジの歌聴けなくて…ごめんね。」

…どうしたらいいのかわからない。だけど、キヨのことを想つと、すく

切なくて…

愛しくて…

キヨをそつと抱きしめた。

「っんなっ！！！！！ケっケンジ？」「そんなに謝んなっつ！！！！！！！ライブなんてムリして来なくていい、歌だっついでいつでも聴かせて

やる！！だからもっと自分を大切にしてくれよ…オレはお前のことがなによりも大事なんだよ。頼むから…自分のこと…。」

ヤベエ。オレも泣きそうだよ。ダセエ…。

「じめん…ね、…ありがとう。」

キヨは、オレの腕の中でそっと呟いた……………。

しばらく、このまま時間が止まってしまえばいいのに…そう願った。

しばらくしてキヨが口を開いた。

「ねえ、さっきのホント？」

「えっ？さっきのって？？」

「いつでも聴かせてくれるって。」

キヨが満面の笑みで言うてる。

「…同じで？」

周りには他の患者さんがいる。ただでさえさっきので、注目されているというのに、歌なんかうたったら…ヤバイかなり、恥ずかしい。

しかも、あの歌を……。

「ねえキヨ、まだ体だるい？」

「うん。さっきよりだいぶ楽になったよ。」

「じゃあ、屋上行こつ……!!」

そう言うとオレはキヨの手を引つ張って屋上へと行った。

「うっわあ。やっぱり寒いな。」

キヨは肩にストルをはおっていたけど、すごい薄着だったから、オレのジャケットをかぶせてあげた。

「あつたかい。ケンジは大丈夫？寒いのが苦手だったよね。」

「オレはこんなの大丈夫……つくしゅっつ……!!」

「アハハ。手エかして。」

キヨはオレの手を握ってそのままジャケットのポケットへ入れた。

「あん時といっしょvvv」

……ま、いつか。あつたかいしキヨが笑ってるから。

「あも……アカペラとかホント自信ないから……。それに言い忘れてたけど、キヨのことだった歌なんだ。」

「っえ?!昨日のライブ？」

オレはうなずいた。

「初ライブハウスで？・・・私なんかの歌でよかったの？」

「キヨの歌だからこそなんだ。だから昨日来てなくてがったりだった...。」

キヨがしゅんっとなる。

「なんてな（笑）ホントは昨日来てくれなくてよかったと思ってるぜ！...だってこうやってキヨと一対一で聴いてもらえからな！」

「なんか恥ずかしいよ／＼／＼」
キヨが赤くなる。

オレは小さな声でうたった。

寒い日は

君の手の温もりが

恋しくて

君の笑顔が

ボクを元気に

してくれる

だから僕は

君の好きな冬が

好きだ……

キヨはまだポケットの中でオレの手を握っていた。

「ケンジありがとう」

キヨはそう言って鼻歌で歌い出した。

「お前覚えるの速えーよ！」

「この曲すごく好きかも。題名は？」

「うーん、まだ考え中なんだよね。」

「じゃあ、私の名前ってのはどう？」

「…どうなのそれ。」

「なによお！私の名前じゃあ不服だっていうのっ！」

「そんなに怒んなって。いい題名ならちゃんと考えてやるから。」

「だあかあらあ、それが気に入らな……」

急にキヨが喋るのをやめて空を見上げている。
オレもつられて見上げてみた。

「…っ。」

冷たいものが目に入ってきた。

「わあー。また雪だあ。なんか今日の雪、太陽にあたってキラキラしてるう。綺麗だねえ。」

キヨは昔から本当に冬が好きなんだ。

「今すごく幸せだよ私。ケンジが隣にいてくれ、歌聞かせてくれて、おまけに雪のシチュエーション！もう最高っっ！！！！！！」

キヨがはしゃぎながらオレの顔を覗いてくる。

「オレも今スゲー幸せだよ。」

オレは冬がキライだ

寒いし

手かじかむし

んでギター弾きにくくなるし。

でも、君が喜ぶから

冬が好きだ…………。

なんかすごく矛盾してる。

「ビビッ……………ビビッ……………」

朝、携帯のバイブ音が何回もなり響く。
オレは朝が苦手で重い声で電話にでた。

「誰だよ。」

「ケンジねてたか。」

「あたりまえだろ。今何時だとおもってただよっ！」

電話はクラスの友達からだった。

「……………」

「なんだよ。」

「実は…さ、さっきクラスの連絡網回ってきて
「……………?!」

オレはベッドから飛び起きて、部屋着でいることも忘れ寝癖のまま
家を飛び出して病院へと走った。
無我夢中で…。

キヨの病室。

患者さんと看護師さんの話し声。
鼻を突くような消毒液。

昨日と何も変わらない。

…ただキヨが昨日寝ていたベッドだけが変わっていた…。
シツも、枕も、布団も、キヨの私物も、何も無い。キヨがはじめ
っからそこにいなかったかのように。

オレは、ただその場に立ち尽くすことしかできなかった…。

急だったらしい。

昨日の夜、高熱と発作が出て…………。

オレは同級生達の一番後ろで線香をあげる順番を待っていた。
みんな、うつむいたまま、一言も言葉を交わすことはなかった。

オレの順番が回ってきた。泣いているキヨの両親に頭を下げて線香をあげる。

「君がケンジくんだね。」

キヨの父親に呼びとめられた。

「はい。」

「君の話はよくキヨから聞いていたよ。…最後にキヨの顔を見ていてやってくれないか。」

「……。」

オレは何も言えず、キヨの顔も見ることができなかった。たぶん穏やかな顔で眠っているんだろう。でも、オレは最後に見たキヨの顔を、あの時の笑っているものにしたかったから……。

外に出ると、やっぱり寒くて、また雪が降りだしていた。ゆっくり、ゆっくりとオレに向かって落ちてくる。

手のひらをだすと、吸い込まれるように、オレの手のひらに落ちて、そして消えていく。

この雪がキヨと重なった。
儂い命……。

すぐに消えてしまふ。

頼むから、消えないでくれ。

オレはこの時はじめて泣いた。

オレは冬がキライだ。

寒いし

手がじかむし

んでギター弾きにくくなるし

冬が好きな君がもういないから……。

はっとして目が覚める。

「いつの間にか眠っていたのか。懐かしい夢だったな。」

キヨ、オレはあの時よりだいぶ強くなったよ。

いっぱい泣いて、いっぱい振り返ってみたから。だから今は少しずつ前を向いて歩いている。

でも、キヨを忘れることはないと思う。

オレの心の中にずっと生きてるから……。

雪を見て喜んでいるあの時の笑顔のまま……………。

外を見ると、まだ雪が降り続けていた。

キヨの好きな雪。

しばらくは止まないでほしいと、心の奥底でそう思った。

(後書き)

この小説は「冬の幻」という曲をイメージして書いたものです。そのことをご了承ください。
また、曲とリンクして読んでもらえれば幸いです……!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1623e/>

キミと見た冬

2011年1月31日00時23分発行